

町田 貞先生をしのんで

2001年12月29日83歳で御病気のため亡くなられた。地形学の巨星を失った事を悔やみ、慎んで哀悼の意を表したい。

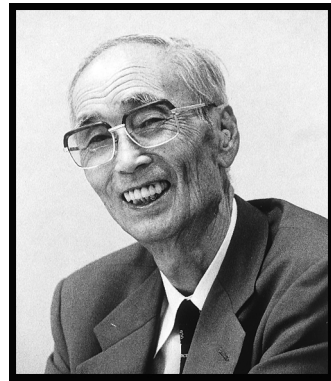
町田 貞先生は、本協会の評議員を1972年～1978年、1980年～1986年の間務められ、1976年～1978年は本協会理事を務められ、本協会の発展に多大なご尽力を頂いた。

私の記憶に残る町田先生は、東京教育大学「地形談話会」の席で、ヒョウヒョウと立たれ、鋭い質問をされるお姿、また学会の発表会会場で発表者に対して小気味の良いほどの的をついた質問をされるお姿であった。地形学を志す後輩として拝見したお姿は、長身で、細いお身体からほとぼしりするシャープな見識に、近寄りたがたい先生との印象を持っていた。しかし、晩年は円熟した大地形学者の穏やかな風格を示しておられた。

町田先生は群馬師範学校、東京文理科大学を経て東京教育大学では理学部長を務められ、1976年に筑波大学に移られてからは副学長を務められた。その後図書館情報大学学長、上武大学学長を歴任され、研究と教育に当たられた。

町田 貞先生は、河岸段丘の研究をされ、多数の論文を集大成して古今書院から1963年に「河岸段丘 その地形学的研究」を刊行された。河川堆積物に基づきその形成営力を明らかにしていく方法を取られ、地形学が自然科学の手法を取り入れ、より数量化していくターニングポイントを作られた。

その後も「日本地形論(上)」の共著者として、当時の地形学の進むべき方向を示され、学界では、この本はバイブルのごとく読まれた。その後は数々の研究をされ、海岸の砂れん型の研究や、文部省科学研究費(海外調査)に基づくブラジルのカーチングの研究で成果をあげられた。また、主たる编者として二宮書店から「地形学辞典」(1981)を出版された功績は大きい。それまでの地形学用語は指導教官が先輩かに聞く以外に方法はなかった。やっと英独仏と日本の用語を対照することができ、また的確な用語の説明を誰もが共



有することができるようになった。この辞典で地形学のスタンダード作りを完成されたように思う。その後20年間、私の所属する地理学教室では、最も手あかで汚れ、使用頻度の高い本の一つになっている。1984年には、「地形学」を大明堂から出版された。この本によって先生御自身の地形学の体系を我々に示された。研究論文で、最先端の地形学の成果をあげたばかりでなく、「町田地形学」の真髄を示して下さり、後に続く者に著書として残して下さい。その仕事ぶりは、お人柄そのものである。

その一方で、地理学者としては珍しく、行政的手腕に優れた力量をお持ちだった。御多忙な公務の中、日本地理学会会長を1986年から一期務められ、文部省大学設置審議会メンバー(1975年～1976年)も務められた。1995年4月には勲二等旭日重光章叙勲の栄を受けられた。先生は御自身の経歴を「学問・教育・人生 ある大学教師の回想」として残されているが、その中に何ゆえ地理学が学校教育の中で衰退してきたのか、その理由が書かれていて興味深い。地形学のリーダーとして、また地理学のリーダーとしての見識を記録しておられることに地理学の将来を思う一人として心より感謝したい。

藤沢の御自宅には町田先生が信頼し、留守を任せてきた光子夫人がおられる。

漆原和子